

# 国立民族学博物館

National Museum of Ethnology

## 収蔵・展示ユニットが 増殖を続ける博物館

大阪府吹田市の国立民族学博物館は昭和52(1977)年、日本万国博覧会の跡地に竣工。収蔵資料の増加に伴って増築する構想で建設され、現在では日本有数の規模となった。設計はメタボリズムを提唱した建築家・黒川紀章。その初期の傑作と言われる。



開館から繰り返してきた建物の「増殖」「成長」が、世界有数のコレクションの収蔵・展示を可能にした。南西角にさらなる増築を構想中。

©国立民族学博物館



ロビー天井の波模様は指紋を表す。指紋は全人類が持ち、それぞれ異なることが民族学の原理に通じるとされる。



本館中庭。日本庭園に見立て、壁面に雪見障子風の格子をしつらえた。ビデオテークの背面が突き出ている。



①ビデオテーク。ビデオ、カセットをロボット制御で再生装置にかけ、来館者が閲覧する装置。当時の最先端技術。現在は、可視光通信を使った最新式のシステムに更新されている。  
②建築前の構想画。

©国立民族学博物館



南アジアや東南アジア展示場、音楽展示へ、自在にルートが選べる館内。9つの地域展示場を回遊したり、好みの展示だけを見たり、自由な動線が描ける。



展示場内は展示物を引き立て、影が気にならない黒色が基調。アルミダイキャストで格子を成形した展示用パネルや、露出型天井で自由度の高い展示をめざした。

国立民族学博物館は文化人類学・民族学分野で世界全域をカバーする研究者達と総合研究大学院大学2専攻を擁する教育研究機関であり、研究成果の公開と資料蓄積のために博物館機能を備えている。口の字型の本館を中心に、40m×40mのやや小さい口の字型展示棟7棟と、特別展示館などを配する。概ね1階が収蔵、2階が展示、3階が情報・管理、4階が研究にあてられ、各展示棟はそれぞれ全機能を備える完結したユニットになっている。開館当初、資料は渋沢敬三が収集したものや万博テーマ館のために集めたものを核と

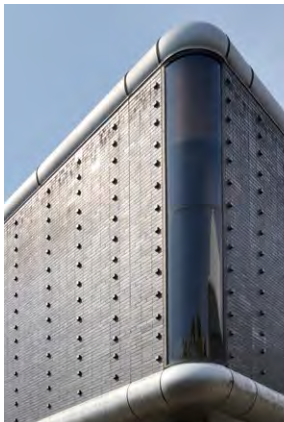
する約4万5000点<sup>※1</sup>で、展示棟は4棟であった。現在は約34万5000点<sup>※2</sup>。20世紀後半以降に築かれた民族学コレクションとして世界最大だが、1979年以降のユニット増築が収蔵・展示を可能にしてきた。これは高度経済成長期の1960年代に展開された黒川紀章らによる建築運動・メタボリズム(新陳代謝の意)と、初代館長で建設に貢献した梅棹忠夫の「成長する博物館」の思想を反映するものであった。建物を口の字型(格子状)としたのは、来館者の選択可能な観覧を実現する動線計画に基づくもので、回遊式とも呼ばれる。展示する

世界各地の文化には独自の価値があって優劣はない。そのため、同じ平面で見て比べるべきとする当時の文化相対主義の考え方が表されたものでもある。中庭(パティオ)も口の字型建物の産物で、展示空間として、また、博物館に屋外の環境や外光を取り込む仕掛けとしてつくられた。ユニットは増築を重ねてきたが、敷地南西には空地が残されており、今後も増築の可能性がある。その意味で未完の建物といえ、建築家没後もメタボリズムのコンセプトが継承されている唯一の例としても貴重である。

※1.内、約5000点を展示。 ※2.内、約1万2000点を展示。



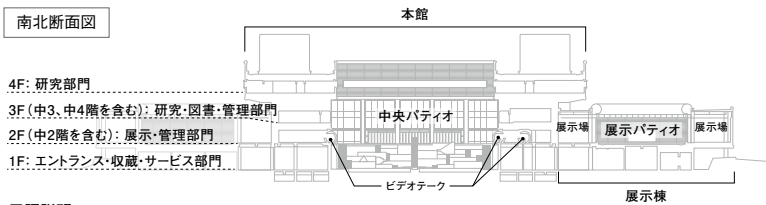
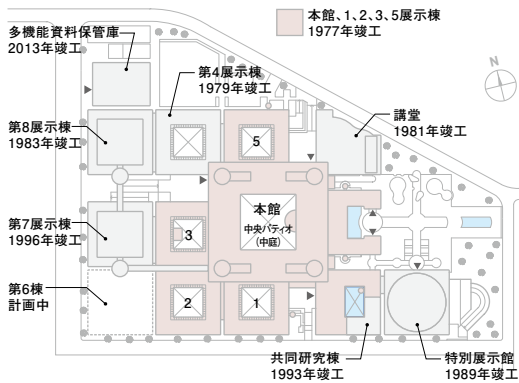
周辺の緑との調和を考え、高さを抑えた建物。日本家屋の軒をイメージしたとも言われる水平線を強調したデザインで、外壁は「利休ねずみ」色のタイル貼り。



「利休ねずみ」は、日本の風景に浸透しやすい色彩として黒川が好んだ。



本館の円筒(写真上)にエレベータなどを集約、各階を最短距離で結ぶ。手前は非常階段。



用語説明  
【メタボリズム】建築や都市は、生物と同じように代謝を繰り返して成長する有機体であり、時代や用途の変化に応じて設計すべきという考え方。1960年代に黒川紀章らが展開した建築運動の理論。  
【渋沢敬三】昭和の実業家、民俗学研究者。資料の収集と保存、研究に努め、民俗学や民具学などで先駆的役割を果たした。  
【テーマ館】太陽の塔・大屋根など、地上や地下、空中の3層にわたる展示空間。

協力:国立民族学博物館 〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1

くらしは文化  
バックナンバー

